

ネガティブ・ケイパビリティ

最近、「ネガティブ・ケイパビリティ(negative capability)」という言葉をよく聞くようになりました。この意味は、「どうにも答えの出ない、どうにも対処しようのない事態に耐える能力」、あるいは「性急に証明や理由を求めずに、不確かさや不思議さ、懐疑の中にあることができる能力」といわれています。

これまでは、問題が生じれば迅速かつ的確に対処する能力としての「ポジティブ・ケイパビリティ(positive capability)」の方が、私たちにとって馴染みのある概念でした。

そして教育や子育ては、特にこの「ポジティブ・ケイパビリティ」が支配していた世界といってもいいでしょう。いかに早く、正確に、そして効率的に学習内容を定着させられるか…ということに、親や教師もとらわれていた面があると感じています。

学習だけでなく、たとえば不登校という事象についても、子ども本人にとってマイナスの状況と捉え、学校復帰を急がせる傾向もかつてはあったと思います。

しかし今は不登校に対する見方も多面的であり、「本人が選び取った避難所」などの考え方も許容されています。そしてわが子が自ら折り合いをつけて新たに進む道を見出す時が来るまで、親や教師が子どもの変容や成長をじっと待って共に見守る姿勢も大切になっています。

精神科医の帯木蓬生氏は、「ポジティブ・ケイパビリティ」のみを求めていくと、得てして表層にある問題のみをとらえて、深層にある本当の問題を見逃してしまう、対象の本質を見失ってしまうことを危惧しています。一時期流行った「鈍感力」などの言葉も、物事に対して敏感に反応し過ぎたり、急いで解決し過ぎたりする態度を戒め、自分の信念に基づいて、じっくりと本質や対局を見極めていこうとする態度であると考えます。

学校や教師にとっても、問題解決能力を有すること以上に、性急に問題を解決しないで不安定さや曖昧さにも耐える能力、つまり「ネガティブ・ケイパビリティ」があるのかが問われる時代になってきていると私は感じています。正解を求めて急いで解決しなくても、混沌とした状態にもじっと持ちこたえていく…そんな態度を私たち大人も身に付けられるように視点を転換していきたいと思っています。